

## 「教えられる・追求できる・成長できる楽しさ」

「教諭」という職業に就いて、この言葉を自ら使用する機会はありません。最近では「教え諭す」ことよりも、生徒から間接的に「教え諭される？」ことの方が多くなってきた気がします。年齢や経験を重ねると見えることと同時に見えないことも増えてきます。「教諭」は、児童生徒・保護者・同僚・地域の方々など、私を取りまく多様な人々から教えていただく機会を得ている職業であると理解すればいいのかもしれない。

生徒に、「学校で多くのことを学習し成長している皆さんにとって、朝に会った皆さんと帰りにあった皆さんとは別人ですよ」とよく言います。そういえば私も一日の業務を終えると、朝とは違う別人の自分がいるような気がします。いつまでも若くいることができるのも（自称ですが…）生徒のおかげなのかもしれません。

私にとって「授業」が軸です。25年間これがぶれたことはありませんし、教壇という「ステージ」に上がり緊張しなかったことは一度もありません。「客席」にいる「生徒」こそが主役であることを忘れずに、いつかは人生のさまざまなステージにあがる生徒たちへのエネルギーになるような授業を自分のステージから届けたいと思っています。いつもうまくいくとは限りませんが、いつまでも自分の未熟さを思い知らされます。それは恥ではなく、思考と試行を繰り返し追求していく過程の面白さであり、この職業の奥深さであると感じるようになりました。研究会等への参加の支援制度もあり、毎年他県の先生方や大学の研究会に参加をしてスキルアップをはかる機会をいただいています。

これまでの勤務校で同僚の先生方のアドバイスや背中を見て育ちました。今も不安や悩みもありますが、その人たちの声が「天の声」として降り注ぎ、私を救ってくれます。今は同じ職員室で若い世代の先生方に囲まれて仕事をしていて、新しい考え方をいただきながら成長させていただいています。経験を積み重ねてこそできることもありますが、「新しい風」がさらにこれからのふくいの教育を活性化していけるような気がします。